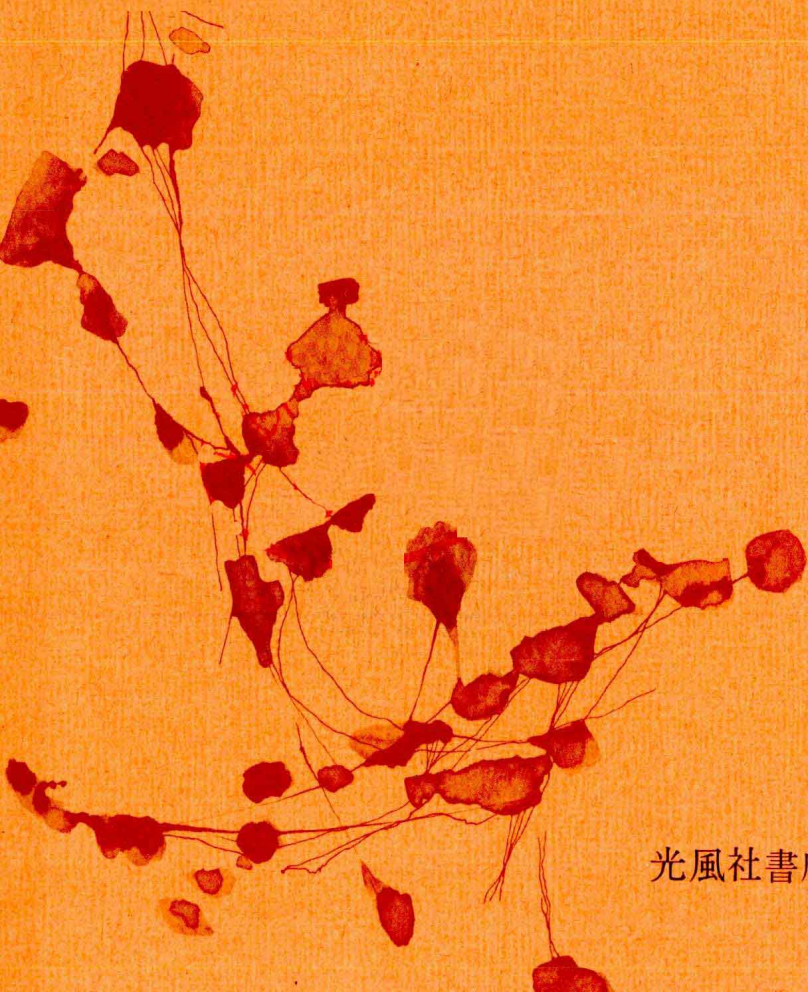




しあわせの心の架け橋

水上 勉



光風社書店

しあわせの心の架け橋

昭和四十五年十一月十五日 印刷
昭和四十五年十一月三十日 発行

△検印省略▽

定価 四二〇円

著者 水上勉

発行者 豊島 勘

印刷者 菅生 定祥

発行所

株式会社 光風社書店

東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話東京(二九一)〇二三八番
振替東京 一一二九 一一三番

落丁・乱丁は御取替いたします。

0095—074101—2265

目次

しあわせということ	七
小さい橋	一七
恋愛指南	三五
化粧は程々にすべし	三七
美貌と醜貌について	四〇
二ど同じ傷をうけた人々に	四四
嫉妬ぶかい男性は愛情も深いか	四八
妻子ある男性が好きになった場合	五〇
年下の男性にひかれた場合	五三
デートに遅れてやってくる男について	五七
父母を大切にしすぎる相手について	六三
学歴について	六七
バアや呑み屋が好きな男について	七二

結婚前でも愛する人ならば性関係を持っていゐるか

オールトミスよ歎く勿れ

手鍋さげても……

恋仇について

ひと恨惚れについて

足幅三尺というけれど

浮気も人生勉強の一つなり

嘘の効用

ある見合い

帯に短し襷に長し

同棲について

男は危険だというけれど

めぐりあったということ

冒険について

なかなか打ち明けてくれない人

六七

六八

六九

七〇

七一

七二

七三

七四

七五

七六

七七

七八

七九

八〇

八一

教養がありすぎて	一六三
恋もけじめをつけるが肝心なり	一六六
水すぎた春のこと	一七三
ある女性の手紙について	一七六
農村出の女性に	一八三
親の素行に悩む人に	一八六
若いふりみてわがふり直せ	一九三
昔のひとが忘れられない	一九六
妻と別れた直後の男との恋	二〇三
よく職業を変えたる男性について	二〇六
男性への復讐	二一三
好奇心と興味	二一六
不甲斐なき男性たち	二二三
淋しい女性の手紙	二二六
新婚列車の中に	二三三

都会の亀裂の中で

二三八

男を転々する女

二四三

都落ちを願う女性

二四六

心の中の「土」

二五三

恋人は寝て待つべし

二五七

装幀 難波 淳郎

装画 司 修

しあわせの心の架け橋

しあわせということ

大事なことばが、やたらに使われている。「愛する」とか、「真実だ」とか、「しあわせだ」とかいったことばが、たとえば、茶色に染めた髪の少女の、「世界は二人のもの」とか「愛しちゃったのよ」とか唄う口ぶりに似て、家庭でも、学校でも職場でも、軽率けいそつにかいふるされている。ことばのもつ大事な意味はもろろのことだが、そのことばにながつて生きてきたデリケートな日本人特有の美しさは失なわれ、逆な意味にとられているような気配もある。いちいち気にしていたらカンシヤクは切れないが、たとえば、どうだろう。あなたはしあわせか、と問われて、「はい、しあわせです」とこたえられる人はまさかあるまい。それほど、己おのれをふりかえれば「しあわせ」ということばの意味は深いはずである。ことばが失なわれている時代は、物がゆたかすぎて思想のない時代なのかもしれ



れない。

私は今日まで約百冊近い小説を書いてきたが、「愛する」とか「眞実」とかいうことばを、地の文で輕薄に使うことを、もつとも戒めてきたつもりである。百冊近い本の中に、主人公がたとえば相手の女性なり男性なりを好きになつて「ぼく愛してる」などというようなセリフか描写があつたら、破り捨てたいと思つてゐる。私にとって、「愛する」のことばは重すぎて、そうかたんに使えないのである。「しあわせ」ということばも、それに準じてゐる。そう、あたしはしあわせだということばほど輕いことばはないではないか。小さい頃、京都の寺で小僧をしていたので、和尚さまからいろいろと修業を強いられてつらかったが、九羊を育てる貧よりも、一羊を育てる富を取れ、といわれたことが今日ものこつてゐる。九匹の羊を飼う金持がもう一匹ふえれば十匹になるので、隣りの一匹しか飼つていない貧乏人のところへ行つて、どうせきみのところは一匹なのだからうちへゆずつてくれまいか、と頭を下げてゆく話である。一匹だけで楽しんでゐる家を貧しいと断ずるのは、物量主義である。九匹あつて十匹に届かないことをはずかしいとする心は貧しいのである。欲ばりというだけでなく、隣家へ頭を下げる姿は見苦しい、と和尚さまは教えたが、今日の若い女性のなかで、一羊を育て、そこにしあわせを抱くゆたかな心もちあ

わせる人はすくない。羊でなくても鶏でもいいのだ。数量主義だと、将棋盤しょうぎばんほどのせまい網の中で、何百羽とならべられて養われる近代鶏舎の鶏である。これなど水たきにしても味けないものであって、名古屋あたりは、死ねば肥料にする農家もあるそうだが、これにくらべ、貧しい農家が、朝夕散歩にだして飼う一、二羽の鶏は、地めんのみみずや若菜をたべ、季節のおとずれが肌に沁しみみているので、鍋で煮てもおいしい。卵も地玉子といわれて温かいのである。めんどりが抱けばかえる卵である。

高校や大学は、つまりは、この鶏舎に似ている。毎年大ぜいのお嬢さんがたが社会に出てくるが、その大半が、都市化の文明に幻惑されて華美を求める弊へいはいわずもがなであり、たまに、地味な手職や、工芸にあこがれて、都をはなれた山間に入って修業する人がいるにしても、十日と辛抱出来ず、そこに培つちかわれるはずの境地と程遠いのは、ことばが観念としてつめこまれ、肌にしみこんでいなかったためであろう。みみずや若菜をたべる、自然のいのちに対して、謙虚で、驚きをもつ魂は、学校生活では身につかなくなったのである。か。とすると、社会に出て、しなければならぬことは、自分に地玉子の抱ける力の養成であろう。このことはしあわせの所在と無関係ではない。

情報化時代がすすむと、テレビや新聞、雑誌で早く流行がわかるから、家にすわって

て今日の出来事が大半知れる。ニューヨークやロンドンの女性の服装も、いながらにしてわかる。服装だけではない、あらゆる文化全般についてもそれはいえる。これは私などから見ると、今日の若い女性の眼玉を、広角レンズにするようなあんばいで、天性の眼球のもつ、自然な透視力とか、焦点をあわせる力といったものが失なわれなかつたと危ぶまれてくる。つまり、前後左右、洋の東西に敏感になろうとつとめるあまり、いつも、キョロキョロしていなければならない出目の悲しみのように思われるのだ。女性のなかで、出目を好きなものは一人もいまい。眼は心の窓だから、いつも、きれいに澄み、遠くにピントをあわせて、美しく沈んでいるのに、私など見とれるものの一人だが、いわゆる今日の才けた女性といわれる人は、得てして、多かれ少かれこの精神的出目が多い。キョロキョロする相手に道をたずねても不安なように、かえって盲人に道をたずねた方がいいといったのは支那の先哲である。わが家の食事でも、よく、オカズの批評が出る。たとえば、大根にスが入っていたとすると、駅前八百屋よりは、こっちの角の八百屋で買いなさいよ、と妻が娘にいつている。あすこの方が親切で、店員さんとかんじがいいから、あしたからこっちで買いなさいよ。スの入った大根が食卓にのぼった時、大地の不思議に思いをいたして、話題をそこへむけることが智慧というものはずだが、八百屋の選択に話がゆくのは

はおかしいと思はる。いまは、智恵とは、損をしないように商品をえらぶことであるのか。何々テレビが調子わるければ、こんどは何々の銘柄めいがらにしよう。新しく出た何々カラーは、調節がかんたんだ、といった具合に、何でも知っていること、撰択の眼があることが、才智と見誤みごまられているのである。このような家庭からは、ロクな子は育たぬ。キヨロキヨロと利に鋭敏なばかりの子が育つのである。母子とも、鶏舎学校教育のたまものといえるかもしれぬ。私など、いかにも物知りぶって、あれを買えば損だの、こつちがトクだのといっている女性は、こざかしくて大嫌いだ。といって全然、そうした才能のないというのも欠点にちがいないわけだけれど、程度というものがある。智恵とはスの入った大根をみて、まず大地のめぐみの不可思議を知る以外にない。

私は、女性が、子をうんでミルクをあたえて平然としているのに不思議を抱く者の一人である。ミルクは牛の乳であって、牛はあの乳を仔に吞くませて、ヒズメとツノを養やしなっていることは、小学生でも知っていると思う。すると、人間の母親が、おのれの乳房が老化するのをきらうあまりに、牛の乳をくれてやることは、たんに、子を牛まかせにするといふより、おそろしい断絶をみずからがやつのけていることに気づいている人は少ない。ミルク育ちの学生にゲバ棒をもつ者が多いということが、社会学の先生の調査ではつきり

